

Title	「自ら考える力を育てる音楽教育」の掲載にあたって
Author(s)	
Citation	物性研究 (2000), 75(2): 227-228
Issue Date	2000-11-20
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/96903">http://hdl.handle.net/2433/96903</a>
Right	
Type	Others
Textversion	publisher

## 「自ら考える力を育てる音楽教育」の掲載にあたって

物性研究各地編集委員 本堂 毅 (東北大学)

「自ら考える力を育てる」。これは、私たちが日常、大学などでの教育に於いて、最も重要な要素と考えているものでしょう。しかし、私たちの多くは、教育に関する教育を殆ど経ることなく、大学などで教育に携わっています。このような中、「理科離れ」、高校までの理科授業数の削減などに直面し、学生さんも授業をする側も、様々な問題に直面し、困惑し、大学入学後、物理への意欲を急激に失っている学生さんも少なからず見られるように思います。

そのような中、昨年(1999)の12月、私はある小学校で行われた「音楽鑑賞教室」の記事を目にしました。「音楽鑑賞教室」と本「物性研究」誌。一見、殆どつながりがないようにも見えますが、物理を取り巻く上に述べた状況を考えるとき、その優れた授業の体験を共有のものとするには、少なからぬ意味があると考えました。

以下に、私が「物性研究」編集部へ送った記事の提案を再録し、本論文のイントロダクションに代えたいと思います。お忙しい中、記事を執筆頂いた馬場千鶴子氏、本原稿依頼にあたってご協力頂いた、日本フィルハーモニー交響楽団の皆さんに感謝致します。

## ----- 「物性研究」編集部への記事の提案 -----

日本フィルの金管五重奏団が昨年末、東京・港区の芝小学校で「音楽芸術鑑賞教室」を行いました。芝小学校では、演奏会の前に「楽器の不思議を調べよう」をテーマにして、生徒に自由研究をさせたそうです。そこでは、楽器の仕組み、音が出る不思議などを取り上げ、その結果なにが「予想」出来るかを、生徒に考えさせたそうです。演奏会では、生徒の意欲的な態度が、演奏者を感動させ、演奏者は教育プログラムに組み込む可能性を見いだしています(以下に演奏者の「報告」を添付)。

ここで分かることは、担当された先生は、音楽教室を単に音楽という一つの教科として捉えるのではなく、理科の教材としても優れたものだと考え、真の意味での「総合」学習として教材研究を行い、成果を上げたことです。現在、理科離れが指摘され、物理学科に入学してくる学生さんでさえ、実験・観察の経験に乏しいのが現状です。直感で物理を把握する・した経験に乏しいことが、学部の物理教育を難しくしています(直感的な説明がなかなか伝わらず、学生さんはただ数学の問題として物理を解いてきます。無味乾燥です。)

芝小学校の先生は、とても優れた指導、教材研究をされていると思われます。この経験は、小学校の教育のみならず、中・高校、そして大学の物理教育にとっても、得る物が大きいように思われます。そこで、この詳細な報告を書いて頂き、それを出版を通して多くの方に知ってもらえないかと考えるに至ったのです。

当日、トロンボーン奏者として演奏に参加した、伊波睦氏の報告

----- 日本フィル協会、「市民と音楽」会議室(<http://www.japanphil.or.jp>)より -----

港区芝小学校「音楽芸術教室」報告 1999.12.20.13:45-15:15 体育館

[プログラム]

アイブソン編：クリスマス・クラッカー、シャイト：戦いの組曲  
楽器紹介、R.ロジャース：サウンド・オブ・ミュージックよりテーマ、  
エーデルワイス、ドレミの歌

星野編：ディズニー

〈合同演奏〉 わんぱくマーチ、校歌  
(アンコール) ウーバー：草競馬

趣旨：今年度、港区スポーツふれあい文化振興財団の「子供の感性を育てたい」という  
要求に応え、区内の5校の小学校に日本フィルの芸術教室の助成を行うことになりました。

- ・4年生以上約50名が対象。
- ・4年生以上の希望者40名で金管バンドを編成しており、今回は楽器紹介の他に、  
カウンセリング・合同演奏をおこなう。
- ・財団は2000年2月にはサントリーホールで日本フィル名曲コンサートを主催。
- ・次年度予算があれば、学校への芸術教室を倍の10校で続行したいと申し出ている。
- ・創立120周年以上、近くの商店街や唯一の団地の子供が生徒。
- ・1時間15分ほどの演奏会の後、生徒の研究（「楽器の不思議を調べよう」がテーマ。  
疑問・課題、予想できること、わかったこと、の形式で自分で解決していこうという  
方式）はユニークでした。
- ・4つ疑問・課題（演奏の工夫・楽器の仕組み・楽器の由来・音が出る不思議）ごとに  
我々プレイヤーが、コーナーに分かれ、生徒の質問に答えます。
- ・生徒の意欲的な態度を見て感心した。教育プログラムの一環として取り入れてはどうか。

Trp. 星野 究、中務朋子、Hrn. 伊藤恒男、Trb. 伊波 睦、Tub. 青柳哲夫  
担当：高橋勇人

参考文献：

- 1) <http://www.japanphil.or.jp/archives/photo/index.html>  
当日の音楽鑑賞教室の様子（写真）があります。
- 2) 馬場千鶴子、音楽表現力を高めるクロスカリキュラムの開発  
平成9年度東京都教員研究生研究報告書、東京都港区立芝小学校(1998)。
- 3) 吉岡大二郎、日本物理学会誌 Vol.50, p. 666 (1995).  
次の本の書評の中で、氏自らの体験を交え、物理の教材としても音楽が有用である  
ことを指摘しています。
- 4) J. G. Roederer, *Physics and Psychophysics of Music, An Introduction*,  
Springer-Verlag, New York (1995); 邦訳「音楽の科学」、音楽之友社  
(1981)。デンバー大学に於ける講義を背景とした、地球物理学者による書。音響のみ  
ならず、脳に於ける知覚プロセスまで考察した含蓄ある名著。大学での講義に関す  
る具体的提案もあり、その項の末尾では次のように述べられています： "To sum up,  
this is a course that is challenging and fun to teach ---the perhaps  
most interdisciplinary of all that a university can offer at a freshman  
level. It presents a chance to both teacher and student alike, to let the  
imagination fly high ---within the strict boundaries of science!"